

# 昨今の学生相談・学生支援

学生サポートセンター教授

渡部 みさ

今日のタイトルにある、「学生相談」はカウンセラーによる心理的・専門的援助活動、「学生支援」は教育及び支援活動における相談機能全般とされていますが、両者は分かち難い活動であり、学生生活の充実や学生の人間形成の促進に協力していくものです。私の専門は臨床心理学でして、日頃は学生相談室における相談面接を通して学生さんの生活を裏方として支える仕事をしていると考えております。今日お集まりの皆さまの中には、学生支援の表舞台で活躍する立場にある方も多と思います。皆さまとご一緒に、学生さんを支える仕事を出来ますこと、心強く思います。

## 学生相談・学生支援の理論と実践

学生相談・学生支援の語られ方には、理論的なものと実践的なものがあります。理論的部分に関しては、今回の研修会でも昨日から、「大学とは…」という講話が続いていると思いますが、学生相談・学生支援についても、「大学がそもそも歴史的にどのような存在であるか」に則して、「学生をどのように支援すべきか」、「大学としてどのようなシステム・ネットワークを作っていくか」というハードの部分に関する議論が可能です。今日の私の話は実践的な部分・ソフトの部分を中心に進めますが、理論面に関しては、文部科学省、学生支援機構から関連の報告書が出されておりますので、参考にして頂ければと思います。

ただ、そのような報告書を文献として挙げますと、学生支援の全国一律に実現すべきマニュアルのように感じられるかもしれませんが、一方では学生相談・学生支援とは、大学の理念と切り離して考えられないものです。いくら国として「このようにしていくことが望ましい」という呼びかけがあっても、最終的には大学独自の理念に基づいた学生支援が大事になってきます。当然、首都大学東京としてどのような学生に育てたいか、ということと密接に関わって学生支援活動はなされていく訳です。

学生相談・学生支援の「理論」に対して、私たちの実際の学生との関わりは、学生相談・学生支援の「実践」と言うことができてきます。「実践」というものは、

日々新たな複雑な状況で行われるものであり、「こういったタイプの学生には、こういった対応」といった紋切り型のマニュアルでは、対応することが難しいものです。具体的な場面での学生支援の実際を学ぶには、かなりの時間をかけてロールプレイ等の実習を行う必要があると思いますし、今日は、学生支援における基本的な知識、心構えと言ったことをお伝えしたいと思います。

## 各人の「大学生」イメージに影響される「関係」

色々話してしまう前に、皆さんの「大学生イメージ」をお尋ねしたいと思います。「最近の大学生は？」と尋ねられた時、どのような言葉が浮かぶでしょうか？「未熟」と思う方、「軟弱」と思う方、「恵まれている」と思う方。そして「個性的」と思う方、皆さんそれぞれだと思います。

そして、この「大学生イメージ」は、皆さん自身が「大学生の頃はこんな風であった」ということとつながっています。例えば「学生運動」の只中と終焉後との違い、「男女雇用機会均等法」の前後の違い。「バブル経済」の前後の違いです。それぞれ、自分の学生時代と比べての今の学生の特徴を強く感じるようになります。

また、自分と今の学生との「関係」を例える時、「兄」「姉」のような気持ちの場合、「上司」のような気持ちの場合、「父」「母」のような気持ちになる場合、更には「祖父」「祖母」のような気持ちになる場合等、様々あるかと思います。この感覚は実年齢とは異なったもので、人によっては、実年齢ではもう祖父と言ってよい年齢でありながら、青年期の心性をいつまでもお持ちになっていて、学生に対しても「兄」の様な気持ちでおられる人もいます。逆に若い方でも「母」の様な気持ちにさせられる時もあるでしょうし、年齢とは関係なく研究指導上どうしても「上司」として振る舞わざるを得なく感じている方もいます。世代観、人生観、立場…。こういったことに私たちと学生との関係は大きく影響されます。例えば、一人の学生が、年配のA氏には頑なな態度を示し、若いB氏に

は非常に素直な面を見せる、ということもあるでしょう。だからといって、このA氏の学生対応は常に悪く、B氏の対応が常に良い、とは決められません。同じA氏が別の立場に関わる学生とは、スーッと上手くいくこともあるからです。この様な現象は、学生が持つ多様な面と、接する人の複数ある面のどこどこが会うか、その相互作用として生じます。

また時には、支援する人が皆一様に優しい人ではなく、誰かが「駄目なものはダメ」とはっきり伝え、学生に大人の壁を示していくことが必要な場合もあります。その意味では、各人の立場と個性とを十分に理解して、協力して学生の支援に当たる必要があると思います。

### 学生の多様化によって問われる大学全体の学生支援力

大学が時代変化の中でユニバーサル化し、多様な学生が入学するようになりました。一方で大学の在り方も法人化する中で、学生と教職員の関係は変化せざるを得ないと言えます。従来ならカウンターの窓口で書類の受け渡しだけで済んでいた業務も、様々な困難を抱えた学生とより深く関わらざるを得ません。そして論文指導・研究指導においても同じことが言えます。以前より自分をさらけ出して関わらざるを得ない中、親身になり過ぎるあまり、巻き込まれてしまって動きが取れない、そんな状況も生じます。

大学のユニバーサル化は、学生の多様化をもたらしますが、「だから困る」とだけには限りません。色々な学生は私たちの財産ともなり得るものです。多様さ・個性を持つ学生たちは、対応に配慮があれば、大学の将来を担ってくれる可能性もある人々だと思います。そのためには、学生の個別性と多様性に配慮しつつ、教育的・成長促進的視点に立った支援をする必要があります。これは相当に細やかな心配りと長い時間の必要な仕事であり、支援担当となった一人の人が頑張ればよいというものではなく、大学全体の学生支援力を強化していく必要があります。そのためには、部局や職種を越えて縦横に、そして入学から卒業まで連続的に、学生支援を行っていく必要があるのです。

### 現代における青年期の特徴

支援するにあたって、一般的に青年の特徴を見てみましょう。これから話すことは、統計的なことではなく、相談の中で実感したことです。

かつて「疾風怒涛」と言われた青年期ですが、現代の若者は「静かなる青年期」を過ごしているとも言われています。実際、安・近・短と言いますか、車に乗

らず、海外に行かず、コンビニを社交の場にして生活している若い人は少なくありません。そして「地元愛」と言いますか、上京後も地元の友人関係を優先する傾向も目立ちます。男子学生に関しても「草食系」という言葉がはやりましたが、女性と同じように身だしなみを気にする人が増え、中には神経質すぎる人もいます。「希望格差社会」とも言われていますが、希望を持てる立場の若者も、物欲的な野望は少なく、「収入は少なくとも残業のない仕事に就き、身近な人間関係をベースとした小さな幸せを守りたい」という傾向が強く感じられます。全般的に内向きで静的です。

それでは、本学学生の特徴はどうかに関して、相談面接や授業を通しての感触として申しますと、まず公立大学で、東京の大学、総合大学であることで本学を選んできた人が多いように思うのですが、それゆえ、バランス感覚があり、飛躍より地道さを大事にする、どちらかと言うと内向的な人が多く感じるのは、先にあげた現代の若者の傾向と矛盾しません。ここで、「内向的」な傾向には否定的な面ばかりではない、良い意味も感じます。例えば、一般に相談に訪れるのは女子学生が多いものですが、本学では、男子学生も積極的に来談します。自分を内から磨くことを出来る人たちが多いということだと思います。

ちなみに、本学の学生相談室における来談当初の「相談内容」では、心理的な問題を筆頭に、修業、進路、健康、生活の悩み等、様々です。しかし継続して来談する内に、語られる「相談内容」は変化し、深まっていきます。学生相談室では「気軽に、どんなことでも」とよらず相談をお受けし、“問口は広く、奥行きは深く”活動を行っています。

### 青年期・大学生に見られる諸問題、その背景と現れ方

大学生に見られる問題の背景には、メンタルヘルスの問題（うつ・統合失調症等）、性格の問題、発達の問題（アスペルガー、ADHD等）があります。これらの「背景」から生じる問題の「現れ方」は様々です。事件（ストーカー、消費問題、カルト等）となって現れる場合、不登校・ひきこもりとして現れる場合、身体を通して表現（過食・嘔吐、拒食、自傷）される場合等があります。

実際の学生支援では、目の前の学生の問題状況に対応しながら、よりよい解決に必要な背景も抑えていくこととなりますが、メンタルヘルスの問題や発達の問題等については、一般的な知識を持ち、該当する学生への理解の準備をする必要はあると思います。

問題の背景の中で、最近注目されている発達の問題

に触れておきたいと思います。従来から学生支援対象であった身体的なハンディキャップとは少し異なり、対人関係や認知に困難のある「発達障害」が、大学生にも目立ってきたとされています。具体的には、アスペルガー、高機能自閉症、更にはADHD（注意欠陥多動症候群）等の診断名が対象となりますが、病院で診断された学生だけでなく、診断は受けていないけれど「発達障害」傾向が強い学生に対しても、配慮は必要となってきます。実は以前からそういった学生・院生は存在していたのですが、「発達障害」概念が広く知られるようになり、彼らへの支援という新たな視点が出てきたのです。「空気が読めない」「協調性が無い」として「治す」「正す」対応が多かったと思われませんが、個性を尊重した「共に生きる」工夫が求められるようになったと言えます。

次に、問題の現れ方を見ていきます。

**事件性のある問題：**学生が被害者の場合（ハラスメント等）、加害者の場合（ストーカー等）、両方考えられますが、まずは予防が欠かせません。啓発のための講演会も無論必要ですが、日常におけるモラル教育といえますか、ゼミや授業や各種行事で、身近な年長者として私たち教職員が学生との関わりの中で示せるものがあればと思います。学生の多様化、大学の役割変化を受けて、どこまでどのような対応・支援を行うか、必要十分性も検証すべき状況となっています。地道な啓蒙活動と必要な連携の中で、当事者を孤立させない工夫も大切で、問題の背景を見据えた、教育的な対応が求められます。

**不登校・ひきこもりの問題：**同じ不登校状態でも、背景は様々です。不本意入学による仮面浪人であったり、発達障害等をベースとした対人スキルの問題が引き金であったり、メンタルヘルスの問題を背景とした活動性の低下やうつ状態の場合もあります。履修状況、出席状況にこういったタイプの学生の心のSOSが見られるのですが、早期に履修状況でドロップアウトをチェックできることは支援に繋がる可能性を増やしますが、この時の連絡、呼び出し等にも細やかな配慮が必要になります。「授業欠席」の背景は、単なる怠けなのか、仮面浪人なのか、経済問題なのか。また昼夜逆転生活が単なる怠惰なのか、何らかの心身の病の兆しなのか、等を見極め、対応の時期と方法を探ることになります。

また彼らが大学に居場所がないと感じることが少しでも減るよう、様々な居場所の提供の努力は必要です。**身体性の問題：**身体に明確な原因がないにもかかわらず、身体の不調が生じる場合ですが、摂食問題、自傷

行為、様々な身体反応が考えられます。これらの問題は、本来の青年期の心理的問題というよりも、大学入学以前の発達課題の積み残しが大学入学後も継続した場合や、大学入学後に顕在化した、という場合が多いようです。また電子機器の発展、情報検索の容易化により、様々なメンタルな症状に詳しい学生も多く、「うつ」「発達障害」「リスカ」といった言葉を、ファッション、キャラとしてまとう若い人もいないわけではありません。問題状況の背景を推し量ることで、本来必要な対応に近づくのではと思われま

**命を守る支援：**こういった問題の現れ方で、もっとも気をつけたいのは、命に関わる問題であることは間違いありません。命を守るために、私たちはメンタルヘルスに関する基礎的知識習得の努力を重ねつつ、特別な学生の問題とのみ決めつけないことも大切になります。深刻に思いつめてしまうことは、どんな学生にも、誰にでもあり得ることです。常に注意を向け、複数考え得る背景を探りつつ、早めで、過剰ではない対応…言うは易しですが…、声をかけ、見守る、そのための居場所作りを地道に行い、大学がコミュニティとして成熟していく中で、人による安全ネットを幾重にも張っていくことができれば…と思います。

#### 学生期の課題に応じた学生支援

先述の入学から卒業までの連続的な支援について、詳しく見てみましょう。大学生生活は概ね入学期、中間期、卒業期、大学院期と分けることができます。

**入学期：**この時期、新しい環境に馴染むために細やかな個別支援が必要です。入学後のオリエンテーション・ガイダンスはそれを目指した行事ですが、もう少し長期的な守りでは、導入教育としての基礎ゼミナール等が学生にとっては大きな意味を持つこととなります。

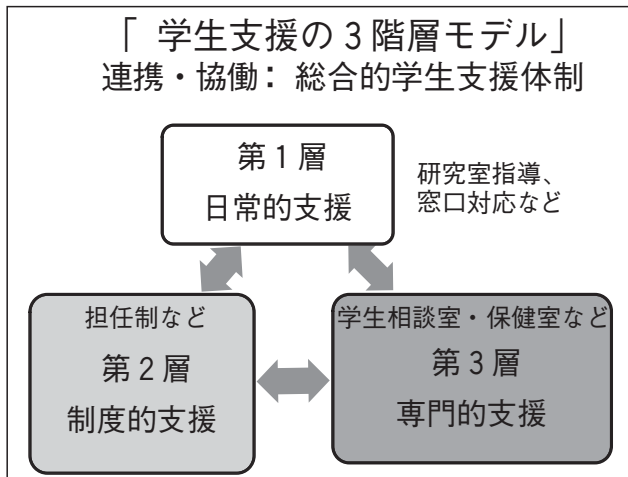
**中間期：**大学には慣れてきた2～3年生の時期では、学生の活動も活発になり、学内外の多様な社会的経験の模索が期待され、それを可能にする支援としてインターンシップ等があります。本学では、中間期以前に、入学直後の学生も参加し、多様な経験をしているようです。

**卒業期：**卒業を意識する1年程の時期には、進路指導等で進路の具体化を支援する一方で、大学生活をまとめる機会の提供も大切です。これは学業上では卒業論文・卒業研究となりますが、こころの仕事として大学生活のまとめを学生相談室とする学生も少なくありません。

**大学院生の時期：**研究環境への再適応や就職支援等が

挙げられます。社会経済状況の悪化により大学院生の就職も難しくなり、実際の就職活動の支援に加えて、心理面の支援も重要となってきました。また他大からの大学院進学者の適応には、細やかな支援の必要性を感じます。

**連携・協働：**このような大学全体の学生支援力を上げていくためには、部署を超えた連携・協働は欠かせません。



上図は『学生支援の3階層モデル』です。第一層は研究室指導や事務的窓口対応等の日常的支援。第二層は制度的支援、本学では、担任、教務担当、就職支援担当等に相当します。第三層は専門的支援で、学生相談室、保健室等が相当します。「階層」という名のモデルではありますが、3層間の矢印は双方向的で、3階層間で交流があることが大切に思います。その意味を込めて、縦列の階層ではない3層並列の図を作成してみました。

ここで、「部署を超えての連携」が大切な一方で、個人情報への配慮、守秘義務の重要性は強調してもしきれません。学生の支援が目標である以上、当事者である学生からの信頼は重要であり、連携は何よりも学生の立場に立ったもの、制度として部署・役職としての連携に終わらない、顔の見える連携、信頼を介した連携が大切となります。

大学は「人を育てていく場」と私は思っております。ここで言う「人」は学生のことだけではありません。教員も職員も私たち皆が育っていくことができる、成長していくことができる。「職員さん、勉強しているんだ」、「先生も勉強するんだ」と学生さんに思ってもらえることは、お互いに良い刺激になるのではないのでしょうか。皆さんの中には担当業務が財務や庶務等で、直接学生に接することのない方もおられると思います。それでも出勤途中や帰宅途中に目にする学生の様子に

少しでも心を配って頂けると大変ありがたいと思います。同じ場所で生活する「キャンパスの仲間」として、関心を向けて下さることは、何よりの学生支援です。そして、もしも気にかかることがあった場合には、学生課や学生相談室にお声をかけて下さると嬉しく思います。このようなことが、学生も、教職員も、大学の構成メンバーとしてお互いに存在を認めあい、尊重し合っていくことに繋がると思います。さらには、そのしるしとしての、気持のよい笑顔と挨拶をお互いにしていければ、これが何よりも、大学のブランド力になっていくはずだと思います。

法人がより発展していく上でも、研究がより推進していく上でも、人が育ち、人が繋がっていくことは必要です。そのために教職員それぞれが学生支援の意識と感覚を磨くことが大切です。学生さんとの関わりの中で、私たちは多く学ばせてもらえますし、成長してゆけるとも思います。その意味で、学生支援は奥深い活動です。

最後に学生相談室利用についてです。学生・院生対応で戸惑うことがありましたら、まず教職員の皆様が相談室にご連絡頂くとよい場合もあります。どうか、お早めに、お気軽に連絡下さい。

ご静聴、ありがとうございました。

## 文献

- 文部科学省（2000）：大学における学生生活の充実方策について（報告）－学生の立場に立った大学づくりを目指して－
- 日本学生支援機構（2007）：大学における学生相談体制の充実方策について－「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」－（報告書）